四丁目東側の産馬通りに面したところに移転したばかりの頃の平野金物店。仕入先の製造会社の店名と商品のイラストがとてもユニークな看板が当時も印象的だった。

古き良き時代の三本木の街を水彩画で描く

平野郁太郎さん

この絵。なんだか見たことのあるような懐かしい景色。昔の十和田、三本木町の建物だ。

見る人の郷愁をそそる素朴で懐かしいタッチの絵は平野郁太郎さん（76歳）の作品。50年間経営に携わった平野商事社長を引退後、公民館の絵画教室で、72歳にして初めて絵筆を持った。若い頃から風景画を観るのが好きだったこともあり、最初は旅先でスケッチした四国八十八ヶ所のお寺や古い城下町の街並みの水彩画を描いていた。

三本木町の絵を描きはじめたのは、昨年秋、商店街で開催されたイベントがきっかけだった。それは、十和田市現代美術館の企画展、和田光弘写真展「都市の記憶」の一環で、商店街のお店が各々の昔の写真を一斉に店頭に展示するというものだった。

商店のウインドウに思い思いのスタイルで展示された昭和中期以前の懐かしい様子が写された写真。それら1枚1枚をまるで名画を見るようにじっくり眺めては、街の記憶を辿っている人々の姿があちこちに見られた。

三本木町の中心街稲生町で生まれ育った平野さんにとってもそれらは大変に懐かしいものだった。通っていた三本木小学校も遊び場も全部この街中だった。店先のセピア色の写真を眺めているうちに、自分の心の中にある懐かしい三本木の画を描いてみようと思い立った。

ところが、なかなか資料となる建物全体を撮影した写真画像がない。図書館の古い資料は、残念ながら貸し出しも複写コピーもできず利用することができない。探しているのを知った知人が大変に貴重な資料を貸してくれた。大正15年発行の『十和田湖と現代の三本木町―寫眞帖』。今から80年以上前の写真集だった。

その中の造り酒屋の看板に惹かれ、1枚目を描いた。五丁目にあったその写真の建物は戦前の三本木大火で消失してしまい、子供だった平野さんに色の記憶はない。イメージで描き上げた絵をそのお店のご隠居に披露したところ、大変喜んでいただいたが、看板と屋根の色が違いますね、と指摘されてしまった。さっそくご隠居の話を聞きながら描きなおした。平野さんのみならず、当時の三本木の街に生きた人達の心に大切に残されているそれぞれの色があるのだ。

さらに昭和31年発行の『十和田観光』なども参考に、大正時代から昭和中期までの三本木町の建物を描き続け、既に14軒以上にもなった。2枚以上描いた建物もあるというから半年にも満たないうちに既に20枚は完成させている。かなりのハイペースだ。

五丁目にあった松橋酒造店。菊水という銘柄の看板に惹かれて平野さんが最初に描こうと思った松橋製造所。

平野さんも写真でしか見たことのない料亭　羽柴亭。産馬通り沿いは、このような料亭と数多くの旅館が建ち並び、*馬喰（ばくろう）と旦那衆が闊歩（かっぽ）する繁華街だった。
＊今の牛馬の仲買人

細いペンで縁取り、優しく水彩絵の具を重ねる手法で描かれた昔の三本木のお店の絵は温かく、見ていると癒される。いつの間にかその時代にワープしているような不思議な気持ちになる。平野さんが描いたこれらの絵は、東三番町にある、おしゃれ雑貨・手作り小物のお店 calla のロビーで見ることができる。

六丁目角の益川呉服店　形は変わったが赤いポストは今も健在だ。西側の現・官庁街には陸軍の軍馬補充部が広がっていた。南側の稲本酒造の裏では精米用の水車が回っていた。その近くの広場は子供達の遊び場だった。

貴重な資料となった本、当時の商店、企業などの建物の画像が数多く載せられている。
（右）大正 15 年の三本木商工業振興会発行の『十和田湖と現代の三本木町―寫眞帖』
（左）昭和 31 年三本木商工会議所発行の『十和田観光』